

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第121号 2025年1月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 学生スポーツと師範学校	長谷川鷹士	2
コラム 通信制高校×博物館－博学連携研究員の活動をふまえて	八田 友和	8
体験的文献紹介(67) 一統中等教育史講演者としての私－	神辺 靖光	14
1981(昭和56)年度大東文化学園予算編成方針の公開 －予算編成方針(1981年3月理事会承認)の教職員との共有－	谷本 宗生	17
大正時代の女子高等教育(70) 同志社女学校の特色、「同志社女子部の母・デントン」	長本 裕子	20
子どもたちと考える校則⑱ ーこれまでの記事を振り返ってー	八田 友和	26
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(10):『全国学校案内』 (明治41年)(2)	吉野 剛弘	30
『嘉納治五郎』(1964年)を読む(3) 木下広次による第一高等 中学校寄宿舎自治制導入に関する嘉納の見解(その1)	富岡 勝	34
刊行要項(2015年6月15日現在)		37
短評・文献紹介 ふるさと納税と大学(谷本)、「学校小説」紹介の 本(富岡)		38
会員消息 谷本、八田、山本剛、長谷川、富岡		39

コラム
学生スポーツと師範学校

はせがわ ようじ
長谷川 鷹士
(上越教育大学)

去年の12月28日から年をまたいで実施された第103回全国高校サッカー選手権大会は先日、1月13日に国立競技場で決勝が行われ、PK戦の末、群馬県代表の前橋育英高校の優勝で幕を閉じた。

その熱戦はともかく、大会前後にメディアなどで歴代優勝校が紹介されるのだが、戦前の大会も含めると最多の優勝回数を誇るのが兵庫県御影師範学校であることが意外な事実として紹介される(1)。戦後は学制改革によって、中等学校レベルの競技大会に後身校が出ることはないので(1936年に姫路師範学校と統合。戦後神戸大学教育学部(現・国際人間科学部)に再編)、高校サッカーファンには不思議な「最多優勝校」に見えるのかもしれない。

目を高校野球に転じると、こちらは戦前の大会を含めても、歴代優勝校に師範学校が顔を出す事はない。ただし、準優勝であれば1919年第5回大会決勝に長野県師範学校が駒を進めている(優勝は神戸一中)(2)。

他のスポーツでも事情は似たり寄ったりだが、煩雑になるのでサッカーと野球だけにとどめておこう。以上のように戦前の中等教育レベルの競技会において、師範学校は一定の位置を占めていた。特に高校サッカー史では、師範学校は黎明期の強豪校として扱われ、競技レベル向上に役割を果たした学校として言及されている(3)。しかし、視点は高校サッカー側にあり、師範学校が中等教育レベルの競技会に参加することをどう捉えていたかには、ほとんど言及がない(4)。そこで本稿では1938年に師範学校長協会が発刊した『師範教育』に掲載された論説をもとに、師範学校が中等教育レベルの競技会に参加することをどう捉えていたか、特にその問題点をどう捉えていたかを簡単に確認してみたい。

磯野清(奈良県師範学校長)の論説「全国師範大会を開催せよ」(5)は競技大会のみでなく、研究発表大会をも合わせた、最上級生を対象とした「全国師範大会」の開催の必要を主張するものであるが、何故、師範生徒のみが集まる

大会が必要なのか。研究発表・競技両大会を合わせた「全国師範大会」が必要な理由として、磯野は①各府県基本的には 1 校しかないため、府県内に比較対象を持たない師範学校は独善主義に陥りやすい、その予防として有意義、②国家的事業である教育に携わる師範生徒同士の全国的交流のためという 2 点の理由を挙げている。なお②について、国家的事業とする理由は「陛下の赤子を育てる聖業」だからであり、教師の使命は「この聖戦に奮闘」することであり「教育報国の志を堅め」る必要があると多分に戦時中という時代背景を反映した言葉が並んでいる(6)。要するに教育という「聖業」にかかわる師範生徒のみで切磋琢磨し、交流する機会が必要である、というのである。

しかし、競技大会単体の必要を主張する論拠ではそうした時代背景は後景に退き、師範生徒が中等教育レベルの競技大会に参加する不都合が述べられている。以下、磯野は男子生徒を対象に説明しているので、男子のみを論じるが、女子の場合も事情はほぼ同様である。

不都合の一点目は年齢である。競技においては「匹敵した相手」「好敵手」がいることによって成長することが期待できるが、師範生徒が中等教育レベルの試合や大会でその「好敵手」を得ることは難しいという。それというのも師範生徒は他の中等教育レベルの生徒に比して「二年以上の年長」だからである。師範学校本科第一部の生徒は高等小学校 2 年を卒業後、5 年間、学んでいたのも、尋常小学校卒業後、5 年間学んでいる中学生より、標準年齢でも 2 歳年長であった。高等小学校卒業後、即座に進学していない場合もあったので、さらに年長ということもありえた。10 代後半で 2 歳程度年長というのは「勝ては当然といひ負けければ腑甲斐なしと責められる」こととなり、中学生に交じって師範学校生が競技することには不都合があるというのである(7)。

二点目は本科第二部の存在である。1907 年に制度化された師範学校本科第二部は中学校卒業生などが進学することとなっていた。したがって、「二部生は母校の弟達と争はねばならぬ矛盾があ」った。「武士道の肯じない」「教育的でない」状況であった(8)。磯野は難しくいっているが、要するに去年まで中学校

のサッカー部や野球部などで共に競技をし、可愛がっていた後輩と、今年は敵として相まみえることになるのである。やりづらいことこの上ない。

主に以上二点を理由として、磯野は「全国師範大会」の「競技大会」の必要を主張していた。

もう一人、太田章一（山梨県師範学校長）の論説「師範競技大会を組織して師範対抗で競技せよ」（9）も検討する。論旨は磯野の論説と似たり寄ったりである。師範学校が対外試合をしようにも「中等諸学校には敬遠され、専門学校は取合はぬ」という状況にある。こうした状況は「最も具体的に師範学校現行制度の不備を明瞭に示表する」ものであると太田は述べている（10）。年齢などを踏まえれば中等教育とはいいいがたく、しかし、制度上は中等教育レベルのため、専門学校からは相手にされないあいまいな立ち位置が問題なのである。師範学校長協会などは教員養成の実をあげるため、師範学校の専門学校レベル化を主張していたが、太田は競技という側面からもその必要があることを主張したのである。「一日も早く現制度が改善されて師範学校が専門学校となり、その全生徒が思ふ存分全力をつくして挙校一致対外試合に当」ることができるようになることを望むと太田は述べている（11）。

しかし、師範学校の専門学校レベル化は即座に実施できるわけではない。「甚だ姑息の嫌はあるが」、まずは「全国師範学校対校競技会開催」を目指すべきだとする。そして、仮に師範学校が専門学校レベル化し、他の専門学校と競技会ができるようになって「インター・ノーマル」は存続する必要があるし、一方で「インター・ノーマル」ができたからといって、他の学校種と争う競技会に参加しないといった「独善高踏的態度は厳に戒むべき」ともする（12）。

以上、2 編の論説に明らかなように年齢などの点で中等教育レベルとはいいいがたい師範学校が中等教育レベルの競技会に参加することについては様々な不都合があると考えられ、戦前の時点において師範学校のための競技会を開催しようとする機運が存在していたのである。ただし、太田の論説にあるように、他校

種との競技会に参加しないことを意図していたわけではなかったことには留意する必要がある。

なお「インター・ノーマル」に類するものとしては、今日においては全国教育系大学陸上競技大会などが存在する(13)。太田が述べたように高等教育化し、同年齢の学生が参加する大会に参加するようになって、教育系大学のみが参加する大会は存在しているのである。もちろん、そうした大会の存在理由は教育という「聖業」に携わることになる学生のみが交流するためではないのは言うまでもない。また参加しているのは教育系単科大学のみであり、旧師範学校系の学部は含まれない、小規模なものとなっているようである(14)。

……高校サッカーの話題から始めたが、実は今回、この原稿を書きながら興味を抱いていたのはこちらの点である。先日、史料調査に訪れた京都教育大学に教育系大学のスポーツ大会での賞状が置いてあったことなども思い出した(それを見ながら、『師範教育』の両論説を思い出したことも、本稿執筆の動機の一つである)。ちなみに所属校の上越教育大学にも教育系大学大会の賞状が置いてあることを先日、確認している。

注

(1) たとえば「【動くグラフ】一位はなんと 全国高校サッカー選手権 歴代優勝校と回数」日刊スポーツ 2025 年 1 月 13 日 17 時 2 分 参照。

<https://www.nikkansports.com/soccer/news/202501120001566.html> (2025 年 1 月 14 日閲覧)

(2) 「全国高校野球選手権(夏の甲子園)歴代優勝校」読売新聞オンライン。

<https://www.yomiuri.co.jp/sports/koshien/summer/history/> (2025 年 1 月 14 日閲覧) なお阪神甲子園球場、日本高等学校野球連盟、朝日新聞高校野球各 HP では準優勝校を確認できなかったため、読売新聞オンラインを用いた。

(3) 「ボールをつないで—高校サッカー100回 兵庫勢の記憶—【上】草創期に

隆盛、日本の礎築く」神戸新聞 NEXT 2021 年 12 月 22 日

[https://www.kobe-](https://www.kobe-np.co.jp/news/sports/202112/0014934408.shtml)

[np.co.jp/news/sports/202112/0014934408.shtml](https://www.kobe-np.co.jp/news/sports/202112/0014934408.shtml) (2025 年 1 月 16 日閲覧)

(4)注(3)の記事で触れられているように御影師範学校蹴球部は部史を作成しているが、筆者は未見である。神戸大学教育学部五十年史編集委員会『神戸大学教育学部五十年史』(神戸大学紫陽会、2000 年)では校友会各部活動の様子は『兵庫県御影師範学校創立五拾周年記念誌』『兵庫県御影師範学校創立六十周年記念誌』を参照するように記載している(p.34)。『五拾周年記念誌』は国立国会図書館に所蔵がなく、神戸大学附属図書館に所蔵が確認できるが未見である。『六十周年記念誌』は確認したが、戦績の記載が主である。また『御影師範学校蹴球部回顧録』というタイトルの冊子があることは確認しているが、現物の閲覧には至っていない(国立国会図書館、兵庫県立図書館には所蔵を確認できなかった)。

なお『御影師範学校蹴球部回顧録』については「御影師範学校蹴球部回顧録」虹色スタジアム(2011 年 12 月 9 日投稿)に表紙の写真が公開されている。

<https://ameblo.jp/148cm/entry-11102052249.html>(2025 年 1 月 16 日閲覧)

(5)磯野清「全国師範大会を開催せよ」『師範教育』第 1 巻第 1 輯第 2 輯合冊創刊特大号、師範学校長協会、1938 年、pp.3-6。

(6)同上、p.5。

(7)同上、p.5。

(8)同上、p.5。

(9)太田章一「師範競技連盟を組織して師範対抗で競技せよ」『前掲』pp.6-7。

(10)同上、p.6。

(11)同上、p.6。

(12)同上、p.7。

(13)たとえば 2024 年 10 月 27 日に第 64 回大会が愛知教育大学主催で開催されている。公益社団法人日本陸上競技連盟 HP 参照。

<https://www.iuau.jp/jigyo/2024/202410jigyo.html> (2025 年 1 月 14 日閲覧)

(14)たとえば「教育系大学対抗戦」2024 年 10 月 27 日 獅友会 WEB(東京学芸大学陸上競技部同窓会)参照。

<https://shiyukai.club/event/kyoiku64/>(2025 年 1 月 14 日閲覧)

コラム

通信制高校×博物館－博学連携 研究員の活動をふまえて－

はった ともかず
八田 友和

(クラーク記念国際高等学校)

1. はじめに

私事ではあるが、2025年1月31日付でクラーク記念国際高等学校（以下、「クラーク高校」と表記する）を退職する。クラーク高校には、2018年4月から2025年1月までの約7年間お世話になった。加えて、7

年間の教員生活のうち、6年間に国

立歴史民俗博物館（以下、「歴博」と表記する）の博学連携研究員として活動させていただいた。教員と博学連携研究員の二足のわらじは、教科指導を充実させるきっかけになった（と感じている）。

そこで、教員生活の総括として、博学連携研究員（以下、「研究員」と表記する）としての活動を振り返りつつ、通信制高校における博物館の活用について考えたい。

2. 通信制高校とは

筆者は全日制高校を卒業後、大学・大学院に進学し、2018年にクラーク高校に就職した。そのため「通信制高校」に関する知識や情報を全く有しない状態で勤務がはじまった。

通信制課程について勉強するなかで、「登校日数」「進級・卒業の方法」「在籍する生徒像」において、全日制課程と相違点があることを実感することになる。簡単ではあるが、両者の相違点を表にまとめた（表1）。なお、勤務したキャンパスを事例にまとめているため、他の通信制高校やクラーク高校の他キャンパスと多少の違いがあることをお許し願いたい。

(表1) 全日制高校と通信制高校の違い

	全日制高校	通信制高校
登校日数	1日6時間×週5日の登校が必要。 年間約200日程度の登校が必要。	一番少ない生徒で月2回程度の登校である。最低限の出席日数で進級・卒業を目指す。面接指導や試験に合わせて集中的に登校することもある。
進級卒業	1日6時間×週5日の授業を受け、試験をクリアする。特別活動の成果が満足できるものであり、各学校が定める卒業の要件を満たすこと。	「面接指導(スクーリング)」、「添削指導」、「試験」などを通して必要な単位を修得し、進級・卒業を目指す。
生徒像	入試によりほぼ同じ学力を有した生徒が集まる。クラス替えはあるものの、3年間を通じてほぼ同じメンバーで学年・クラスを構成する。	小・中学校在籍時に不登校経験を有する者など、多様な背景をもった生徒が在籍している。年度途中に他校から転入してくる生徒も多い。

(筆者作成)

読者の多くが“全日制高校を卒業していること”が予想されるため、通信制高校の仕組みを全日制高校と比較しながら理解するために表1を示している。よって、全日制高校と通信制高校の違いを明示してどちらかの優位性などを示したいわけではないことはここに断っておく。加えて、表1で取り上げた項目以外にも異なる点はあるが、ここでは触れていない。

3. 博学連携研究員とは

“博学連携研究員制度”は「教員がより積極的に博物館の活用を考えて、博物館と一緒に教育プログラムの研究・開発を進めていく制度（歴博サイトより引用）」である。研究員は、現職の教員（小～高等学校、特別支援学校）のなかから応募書類をもとに選出され、2年間で1期として活動する。研究員の活動については、荒井2017で詳しく紹介されているため、ここでは紹介しない。

筆者は3期6年（2019年度～2024年度）にわたって研究員を務めるなかで、下記の資料を活用した実践をおこなった（表2）。

表2 博学連携研究員としての活動

	活 用 方 法	活用した資料など
1期	非 来 館 型	歴博画像データベース（鯨絵）、歴博の展覧会図録など
2期	非 来 館 型	WEBギャラリー「江戸図屏風」およびA0で出力したもの
3期	非 来 館 型	歴博の展覧会図録、研究報告、第6展示室 など

（筆者作成）

なお、筆者や他の研究員がおこなった実践の詳細は、歴博のホームページで紹介されているため詳細は割愛する。

3期6年の研究員活動で「通信制高校こそ博物館を活用すべき」という気持ちが年々強くなっていった（そのように感じた理由は後述する）。博物館には多様で大量な資料が所蔵されており、専門的知識を有した学芸員をはじめとした様々なスタッフも在籍しており、学校教育はもちろん、社会教育や家庭教育など、

様々な機会での活用が期待できる。

4. 通信制高校と博物館

通信制高校における博物館の活用については、その意義や望ましい活用方法を筆者なりに考え、実践・発表してきた(表3)。

表3 通信制高校における博物館の活用

No	タイトル・収録雑誌など
①	高校生による博物館図録の作成－主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践的研究－(『日本生涯教育学会論集41』2020年収録)
②	鯨絵から時代の転換を理解する日本史探究授業開発(『学校と歴博をつなぐ－令和元・2年度博学連携研究員実践報告書－』2021年収録)
③	ミュージアム・リテラシーの育成を目指した日本史探究授業開発(『リカレント研究論集』(創刊号)』2021年収録)
④	教科における生徒の個性に応じた支援－非来館型の博物館活用を事例に－(『リカレント研究論集』第2号, 2022年収録)
⑤	学校清掃の充実を目指した博物館活用の方法(『関西生涯教育研究論叢』第1号, 2022年収録)
⑥	多様な背景をもつ子どもたちに博物館の学びを届ける(『学校と歴博をつなぐ－令和3・4年度博学連携研究員会議実施報告書』2023年収録)
⑦	学校と博物館の新たな関わりを模索する(『古代体験研究フォーラム2022 事業実施報告書』2023年収録)
⑧	博物館機能の疑似体験を通じて資料に込められた思いを読み解く実践(『リカレント研究論集』第4号, 2024年収録)

⑨	生涯学習への発展を目指した通信制高校における取り組みー博物館を活用した学びを手掛かりにー(『日本生涯教育学会年報』第44号, 2023年収録)
---	---

※ 「博学連携」や「博物館活用」についての論文等は他にもあるが、ここでは、通信制高校での実践を取り扱った論文のみを紹介している。

表3で取り上げた実践をおこなうなかで、感じたこと・考えたことを整理する。通信制高校には、「聞く力」「見る力」が弱い生徒が一定数在籍している。そのため、視覚・聴覚以外の感覚器(触覚など)にも訴えかけ、「見る」「聞く」以外の方法で、授業内容などを生徒に伝えることも重要である。一方で、教職員が普段の業務をこなしながら、触れる機会やモノを準備することは難しい。そのため、博物館の資料貸出などを活用し、教職員の負担を軽減しつつ、五感に訴えかける学びを展開することが望まれる。

加えて、学校ではない「第2の居場所」として博物館が機能することも求められる。筆者自身、居場所は「作ってあげるもの」ではなく、子ども達自身が「見つけるもの」だと思っている。そのため、博物館を居場所にしたいか、したくないかは一人一人の子どもたちの判断であるが、現状、博物館は子どもたちにとって、“立ち寄れる場所”の選択肢にも入っていないのではないかと感じている。まずは選択肢の1つに“博物館”や“資料館”を加える努力が求められる。そのように考える理由として、博物館の館種(歴史系博物館、美術館、動物園、科学館、植物園など)が多岐にわたり、子どもたちの興味関心を得やすいことが挙げられる。また、ほとんどの自治体に設置されていることも居場所になりやすいポイントだと感じている。よって博物館は、子どもたちにとって「第2の居場所」になりやすい施設だと感じている。

5. さいごに

約7年間の通信制高校での勤務は、上司や同僚に恵まれたものであった。研究員としての活動を6年間にわたって続けられたことも、博物館や学芸員を活用した学びを後押ししてくれたことも全て上司や同僚の理解があつてこそである。また、博学連携研究員会議では、多くの先生方と交流させていただいた。のべ50人を超える研究員や歴博の研究者・スタッフの方と交流させていただくなかで、筆者自身も大きく成長できたと感じている。

通信制高校在職中にお世話になった全ての方々に改めて謝意を示し、結びとしたい。

【引用参考文献】

・荒木雅子「博物館を活用したアクティブ・ラーニング型授業開発－2015～2016年度国立歴史民俗博物館博学連携研究員の実践を通して－」『教職研究』第30号, pp.85-97, 2017年

・小川慶将『高等学校通信教育規程 令和3年改正解説』2022年, 勁草書房

・角田豊ほか(編)『子どもを育む学校臨床力』2016年, 創元社

・国立歴史民俗博物館公式サイト(2024年10月8日確認)

<https://www.rekihaku.ac.jp/>

・クラーク記念国際高等学校(2024年10月8日確認)

https://www.clark.ed.jp/?doing_wp_cron=1728376770.9682838916778564453125

体験的文献紹介(67)

—統中等教育史講演者としての私—

かんべ やすみつ
神辺 靖光(ニューズレター同人)

本誌「月刊ニューズレター」117号に「中等教育史講演者としての私」を投稿して以来、現在まで欠稿した。本誌に掲載して貰った女子教育史と『明治前期中学校形成史・総括編』を上梓、出版するために忙殺されていたからである。これらの作業も協力者のおかげで、九割方終了したので本誌「統中等教育史講演者としての私」に戻ろうと思う。

前回の話は昭和62年秋から翌63年春にNHKの「朝のテレビ小説はっさい先生」の監修を依頼されたことから始まる。依頼承知と同時に毎日新聞社からドラマに沿って旧制中学生生活の連続執筆を依頼され、以後、半年間、「NHKドラマガイド」と「サンデー毎日」に書き続けた。その間、何度かNHK大阪支局の撮影現場を訪れ、原作者・高橋正圀氏や主演の若村麻由美氏に会って旧制中学生の状況を話し合った。高橋氏が当時から今に続く受験勉強一辺倒の中学校に批判的であったことは嬉しかった。ナレーション担当の檜山文枝さんは旧知の間であった。スタジオで顔を合わせることはなかったが、高校演劇部時代の懐かしい思い出を手紙に託された。ドラマの評判もよく、懐かしい思い出である。

さてNHK「朝のテレビ小説、騒ぎも終り平常の研究に戻った或る日、月刊オピニオン」の記者と称する人の訪問を受けた。青森県弘前を中心に明治初期に興った中学校を記事にしたいと言う。とに角、話を聞いて弘前に出かけることにした。

近世・江戸時代、各藩に藩校があり、それが明治初期の中学校に繋がったと簡単に述べる輩^{やか}を時々見かけるが、そのようなことはない。幕末から維新の動乱の中で藩士・士族たちが猛勉強・学習をはじめたのは間違いないが、それは城下の私塾や郷校^{たよ}を頼ってのことで幕末に彼らが求める西洋式学問を教えられる藩

校は 10 指に数えられるほどしかなかったのである。それら少ない洋学をやった藩の一つにみちのくの弘前藩→青森県があった。

弘前藩校・稽古館は寛政8(1796)年創立、明治に至る。洋学を研究すべく明治3年、沼津兵学校と慶応義塾からそれぞれ2名ずつ英学の教師を雇い入れ、新しく漢英学校を開くことにした。ところが弘前で落ち合った^{ふた}二組の教師は出会ったとたん喧嘩をはじめた。互いに自己流の英語が正しく、相手の発音が悪いという。そこで仕方なく藩は弘前と青森の二ヶ所に学校を開くことにし、静岡組は弘前で、慶応組は青森で教えることになった。やがて廃藩置県、全国の藩学校 ^{ことごと}悉くつぶれてしまうのである。

弘前藩もなくなって弘前県になり、まもなく青森県になる。旧藩の学校は、しばらく弘前城内三の丸の津軽邸で授業を続けたが、明治 5 年 5 月、追手門外の元稽古館を借り受けて弘前漢英学校と改称した。しかし藩がなくなってしまったので資金を出す者がいない。教師も生徒も不安になってやめてゆく。まさに廃校寸前になった。この時、立ちあがったのが菊池九郎である。彼は旧弘前藩士で明治 2 年以来、東京の慶応義塾、次いで鹿児島県の兵学校で勉強していたが、明治 4 年、帰郷して弘前漢英学校の幹事(校長)になっていた。彼はこのままでは漢英学校がつぶれると思い、八方奔走して同志をつのり、旧藩主・津軽承昭に頼んで学校建物を譲り受けるとともに 5,000 円の学校資金を貰った。時に明治 5 年 11 月、こうして漢英学校は私学・東奥義塾に変わったのである。菊池はさらに運動して明治 7 年、津軽家から毎年 3,000 円の補助を受けることになり米国人教師を呼んで近代学校化を試みた。日本人教師は旧弘前藩学校の教師と慶応義塾出身者であったため、カリキュラムは慶応義塾のものとよく似ている。よってこの時期の東奥義塾は私立外国語学校とされている。

さて当時の中学校の状況をみると ^{びよう}渺々たるものであった。政府が小学校の普及を第一とし、「中学ハ小学普及ノ後」と指令していたからである。これ程稚拙な学校改革はない。成年期に達した子どもが^ミコトバノソラヨミミなど初学者と机を並べる筈がないからである。文部省はその非に気づいて、中学校に準じる外国

語諸学校を急遽設けたり試行錯誤を繰り返す。青森県では師範学校内に中学科をつくろうとしたが開設に至らない明治 11 年 3 月、東奥義塾が中学科を設けた。これが弾み^{はず}となって 12 年以後、県内 8 郡に 8 中学校をたてることになる。東奥義塾は私立学校でありながら県の公立中学校を先導し、県中等教育の一翼を担ったのである。

このように東奥義塾は青森県の文明開化の灯をともし続けたが、これらについて詳しく述べる余裕がないのでリンゴの栽培について述べよう。

明治 7 年、米国の南軍騎兵大尉ジョン・イングが東奥義塾の教師になった。明治 8 年 12 月のクリスマスの夜、イングは菊池九郎はじめ義塾の生徒十数名を自宅に招いた。食事のあと、イングが大きな箱を持って現われた。蓋を取ると誰も見たことのない芳香を放つ果物が入っていた。一同、驚くうちにイングは「これは見るものではない。食べるものである」と言って、この果物、即ちリンゴを食べさせた。これはイングの故郷、米国インディアナ州からとりよせたものであった。皆はその美味に再び驚いたが、菊池はリンゴを栽培したいと思ってイングに尋ねた。イングが机上の地球儀を廻してみるとインディアナ州と弘前の緯度は同じではないか。これならできると踏んで菊池は早速、イングにリンゴの苗木を手配して貰ってリンゴの栽培にかかった。この苗木が結実するまでには、さまざまな苦心があったが、数年を経て遂にみちのくにリンゴ園が誕生した。東奥義塾もリンゴ園を経営し生徒は原野の開墾、リンゴ植付けに動員されている。こうしてリンゴの栽培は青森県内に急速に拡まっていった。積雪のため冬は出稼ぎ以外に収入のないみちのくに新しい産物が出現した。私学が地域に明るい灯をともした一例である。因みにインドリンゴと言うのはインド産ということではなく、イングの故郷インディアナ州のリンゴという意味である。

1981(昭和56)年度大東文化学園予算編成方針の公開
— 予算編成方針(1981年3月理事会承認)の教職員との共有 —

たにもと むねお
谷本 宗生(大東文化大学)

1981(昭和56)年3月の大東文化学園理事会にて承認された1981年度予算方針を、教職員全体に向けて『大東文化大学報』で公開し、その趣旨をしっかりと共有したいと強調した(『大東文化大学報』第50号、1981年4月)。事業計画を公開するだけでなく、その事業計画の基盤となる予算編成の方針まで教職員全体に示していた点はとても画期的であろう。

一、昭和56年度予算編成の基本

大学は長期計画の初年度を想定し、国の高等教育計画に基づき学生定員の是正の措置をとるため、新年度の入学者は55年度に比し約500名の減員となる。したがって、学生生徒ら納入金の増額は見込まれない。このため、56年度の予算編成にあたっては極めて厳しい状態に置かれることは当然である。各予算単位からの予算要求内容が、従来のような安易な姿勢でこれを求めても到底予算案がまとまるものではないので、この認識を十分に浸透する必要がある。[略]

二、資金収支予算について

イ 収入について

学生生徒ら納入金中その大部分をなす大学学生数について、新入生の数は2022名で計算する。これ以外のものについては従来とおりとする。手数料収入については10パーセント増とする。補助金については8パーセント増とする。資産運用収入については公定歩合の引き下げなどの配慮をする。前受け金については8パーセント増とする。

ロ 支出について

A 人件費について

大学教員増は6名とするほかに、北京外国語学院との交流教員4名の相当額を加える。定昇ベースアップについては8パーセントの加算とする。事務職員の増員はなし。アルバイト料については圧縮を強化すること。

B 教育研究経費について

経費の節減についてはこの科目において十二分の検討をすること。研究費については個人研究費の旅費を含め教員1人あたり26万円を一括して学部配分とする。

特別研究費については、前年度の積み残しを想定したうえで、個人研究費で賄うものも考慮して相当の減額をはかる。管理部においては施設課・管理課・東松山管理課の区分を明確にし混乱を避けること。学内学会の補助については今後の学部研究活動との相関関係において勘案が必要なので留保すること。高校の教育研究経費は低率過ぎるので指導すること。

C 管理経費について

学生募集費の広報費は内容検討を厳重にすること。

D 施設関係について

昭和55年度工事予算のうち建設仮勘定に計上され残額をもつものは56年度予算計上を必要とする。建設工事については板橋校舎の部室新築分および高校部室改築分を計上する。

E 大学図書費について

56年度大学図書購入費は8千万円とする。

三、消費収支について

イ 学生生徒ら納入金に対する人件費比率は85パーセントを上限とする。

- ロ 帰属収入に対する人件費比率は55パーセントを上限とする。
- ハ 帰属収入と消費支出総額の差の帰属収入に対する比率は16パーセントを下限とする。
- ニ 教育研究経費の帰属収入に対する比率は20パーセントを下限とする。

大正時代の女子高等教育(70)

同志社女学校の特色、「同志社女子部の母・デントン」

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

同志社女学校の特色

同志社女学校の特色の一つに、草創期から音楽を正課の中に取り入れていたことが挙げられる。同志社女学校別科の中に音楽科(発音法、楽譜、唱歌、オルガン、ピアノ)が設けられていた。大正8年度から専門学部英文科に選科生として音楽志望者を収容することになった。音楽の授業は1週間4時間、練習12時間。音楽教授は、F.B.クラブなど主としてアメリカ人女教師が指導にあたったが、やがて音楽を学ぶためにアメリカに留学する日本人教師や卒業生が出るようになる。英文科出身で、高等女学校の音楽教員になる者も多かった。関西圏では神戸女学院と共に、数少ない音楽を専門に学べる機関であった。このように草創期から音楽を重んじる伝統ができていたことが、現在の同志社女子大学学芸学部音楽学科につながっている。

またもう一つの特色として、寄宿舎生活を通してキリスト教主義を浸透させようとしたことが挙げられる。「京都ホーム」と呼ばれたように、同志社女学校にとって、寄宿舎生活は重要な役割を果たした。女学校は遠隔地からの生徒が多く、明治26年、通学生はわずか16名で20.5%、寄宿生は62名で79.5%を占めていた。当時女生徒の下宿は考えられず、自宅から通学する以外は寄宿舎に入るのが原則であった。初代学監は、山本覚馬と新島八重の母山本佐久で、5年間務めた。舎監は教頭に比肩する重要なポストであった。

大正中期以降、普通学部は、地方に高等女学校が普及したため、寮生の比重は低下した。それに対して専門学部は台湾、朝鮮、中国などの出身者も含めて地方からの生徒が集まり、寄宿舎の役割は重要であった。大正12年、専門学部

455名中185名が寄宿生で4割強を占めていた。寄宿舎は新島館、家政館、常盤寮、プリンプトン寮、大沢寮など充実していた。

では、大正中期の寄宿生の生活をみてみよう。1室に3～4人の上級生と下級生が配置され、家庭的な共同生活が営まれた。6時起床、7時朝食。それまでに部屋と廊下の拭き掃除をすませて、「お静か」の時間を守った。「お静か」とは、静かに聖書を読み、朝の祈りをするのである。食事は、寮生がグループに分れ、交代で献立を作った。全員が一同に集い、教師か生徒が食前の祈りをして箸をとった。放課後は各自、自由な行動が可能であった。ウィークデーには昼間の外出も許された。夕食後には夕拝があり、時には普通学部（高等女学部）と合併で行うことがあった。夜の勉強は3時間。10時消灯。日曜日は、朝、必ず襦袢の半衿をつけ直して清潔な装いで教会に出席する用意をした。聖日には半衿のつけ直し以外の針仕事は禁じられた。聖書、修身の勉強や讃美歌を歌ったり、手紙を書いたりする以外は禁じられた。クリスチャンは近くの教会、講義所などの日曜学校を手伝ってから、他の生徒は寄宿舎から整列して同志社教会の10時からの礼拝に出席した。夕方には讃美礼拝がもたれた。日曜には学科の勉強は禁止されていた。そのため試験期間中の月曜日に、聖書、修身以外の科目は課されなかった。金曜日にも、夕方の祈禱会のため、同志社教会に寮生全員が出席した。

こうした寮生活の中で、寮生同士が心を合わせて、早天祈禱会を催したり、ミリアム・クワイア（聖歌隊）の活動を行ったりした。上級生がリーダーとなり、外国人教師のF.B.クラップ、ダンカン、M.E.シャネップなどが指導した。普通学部も含め寮生有志により結成され、夕食後、新島館階下の音楽室に集まって夕拝の時間まで練習した。毎朝の礼拝に、プラットホームの横に並んで合唱を行った。日曜日には同志社教会の2階で讃美歌を合唱した。同志社大学のグリークラブと混声合唱をすることもあった。混声合唱は、教会外でも青年会館の催しに出演を求められた。同志社イブではグリークラブ、マンドリンクラブなど共に宗教歌をうたい、最後に全員が同志社ソングを歌った。クリスマスイブには同志社教会でハレルヤ・コーラスを合唱した。昭和2年3月、清和館が焼失した時、改築資金募集

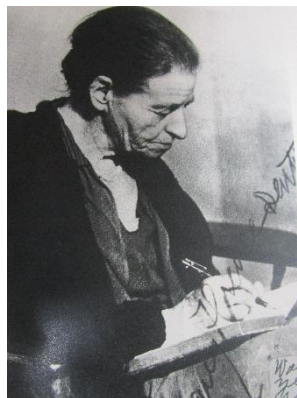
の同志社女学校音楽会が京都、名古屋、岡崎で催され、ミリアム・クワイアは名古屋、岡崎で助演した。このような寄宿舎生活と、ミリアム・クワイアの活動は同志社女学校の特色となった。当時、混声合唱は珍しく、男女共学が可能となった同志社ならではのであった。

国際主義を標榜し、キリスト教主義をもって教育の根本理念とする同志社女子専門学校（昭和5年改称）は、太平洋戦争中の苦難の時期を経て、昭和24年、同志社女子専門学校を廃止し、新制度による同志社女子大学学芸学部（英文学専攻・音楽専攻・食物学専攻）を設立する。前年、同志社大学が共学の新制大学に切り替えられた。財政面からも同一法人の中に四年制の女子大学の必要があるのかどうか議論された。しかし、当時総長の湯浅八郎はじめ有識者の主張として、北米におけるマウントホリヨーク、ウェルズレー、プリンマーなどの五大女子大学のように国の政治、文化、社会の各方面に貢献することのできる女子大学として発達させたいとの念願により、新制の女子大学としてスタートし、今日に至っている。

同志社女子部に貢献した人——「同志社女子部の母」M.F.デントン

同志社女学校草創期の17年間は、A.J.スタークウェザー、A.Y.デイヴィス、V.A.クラークソン、F.ホワイト、M.H.マイヤーの5代にわたって女性宣教師が首長として運営にあたった。それらの宣教師たちのように首長、いわば校長職に就くことはなかったが、同志社女学校に対する思い入れが強く、「同志社の宝」「同志社女子部の母」と称されるほど貢献したメリー・フローレンス・デントンを紹介しよう。

デントンは、1857年7月米国ネバダ州スノーポイントで誕生した。オークランドのボストン・カレッジ・スクール卒業後、カリフォルニア州パサデナで小学校教師を務めていた。その頃に、一時休暇で帰国していた同志社教師のM.L.ゴードンから、同志社と新島襄の話を聞き、周囲の反対を押し切って明治21（1888）年10月に来日した。同志社女学校教授となって英語や家政を教えた。以後、約60年間にわたって、同志社女子部構内のデントン・ハウスに住み、昭和4年に定年を迎えた後も帰国せず、太平洋戦争中は特高警察の監視下に置かれながら生活した。大正5年11



晩年のデントン
（『同志社女子大学
125年』より）

月、同志社40年記念式で、多年の勤続者として表彰された。デントンは、「世界で一番良い国は日本、日本で一番良いところは京都、京都で一番良い学校は同志社、同志社の中で一番良いところは女子部」という言葉が口癖で、この言葉が示すように、同志社女子部をこよなく愛し、生涯を捧げた。

デントンの功績は大きく三つある。一つ目は女子部の校地を拡張し、校舎・学寮を建て、設備を整えるために、自身はこの上もない清貧の生活をしながら、巨額の寄付を集めたことである。同志社女子部を支援していた太平洋ウーマンズ・ボードに繰り返し募金の依頼をしたり、在外の友人や知人に同志社の存在をアピールしたり、京都を訪れる外国人をホテルに訪ねて、デントン・ハウスに招待して寄付を求めたりした。デントン・ハウスには、造りは簡素であるが大広間があった。デントンは内外の客を手料理でもてなした。訪問客の芳名録にはアメリカの美術史家ラングドン・ウォーナー、アメリカの外交官ジョセフ・グルー、新渡戸稲造などのサインがある。デントン・ハウスは内外の賓客を迎えて日米交流の舞台となった。そうしたデントンの熱意で寄付が集まり静和館、ジェームス館、家政館、平安寮、栄光館が建ち、栄光館にパイプオルガンが設置された。

二つ目は、デントンはピューリタンのキリスト教教育を徹底したことである。毎朝行われる礼拝を怠けて休もうとする生徒を、その隠れ場所に追いかけていき、礼拝の出席を促したり、濃厚な化粧をしている生徒を洗面所に連れて行って洗い落させたりした。こうしたデントンの指導は、行き過ぎのように思われるが、彼女の信念に基づくものであったので、叱られる生徒は「すがすがしい恐ろしさ」と感じ、決して嫌味とは感じなかった。また、過ちを詫びにいくと、デントンはすぐに許し、美しい花を与えて帰したという。

三つ目は、デントンは同姓である女性に対して、決して卑屈にならず威厳を持って積極的に社会と関わって生きる大切さを教えようとしたことである。「女性であっても権利はしっかり主張せよ」と亡くなる10年前に遺された「覚書」に述べている。

デントンの人柄を伝えるエピソードがある。デントンは靴下を生地が見えなくなるくらいまで糸で繕って履いていた。洋服も修繕して着用していた。寮生たちを5人ずつくらい順にデントン・ハウスに招き、お茶とお菓子を提供し、一人一人にハンカチや靴下をプレゼントした。自身は修繕した靴下を履き、生徒には新しい靴下をプレゼントしたという。(水野いずみ「デントン先生のプレゼント」参考)自身はことごとく節約しながらも、生徒にはこよなく愛情を注いだことが窺われるエピソードである。

米国との戦争が色濃くなったころ、ほとんどの米国人が帰国したにもかかわらず、デントンは日本に残った。特高警察の監視下、教え子で大正元年から同志社女学校で裁縫を教え、昭和5年に同志社女子専門学校教授に就任した星野ヒサに支えられながら、デントンは同志社女子部のために尽力した。昭和29年5月胃潰瘍のため、デントン・ハウスで死去した。同志社の裏にある相国寺長徳院墓地に墓がある。その隣には37年にわたってデントンを支えた星野ヒサの墓がある。また、今出川キャンパスの図書館屋上には、デントンと星野ヒサの友情を記念する碑が建てられている。そこには加藤順三作の和歌が2首刻まれている。

海をこえ国をもこえて神のみ手にむすばれしこの淑き人ふたり
世界のはなうつし植うべきこの苑をのこしおきたるよき人ふたり

参考文献

『同志社女子大学125年』

『同志社百年史』通史編一

『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校』上巻・下巻

畑中理恵『『大正期女子高等教育史の研究』—京阪神を中心にして—』

湯川次義『近代日本の女性と大学教育』教育機会開放をめぐる歴史

宮澤正典『同志社女学校史の研究』

黒田孔太郎「ジェーンズ物語」

水野いずみ「デントン先生のプレゼント」同志社女子大学・宗教部・チャペル
アーカイブ「140年を語りつく」

青山霞村『同志社五十年裏面史』

「メリー・フローレンス・デントン」ウィキペディア

「星名ヒサ」ウィキペディア

子どもたちと考える校則⑱

ーこれまでの記事を振り返ってー

はったともかず
八田 友和 (クラーク記念国際高等学校)

1. はじめに

これまで、「子どもたちと考える校則」と題して17本の記事を連載してきた。記事を執筆する過程で、様々な論文や実践報告を精読し、勤務校での実践や研究発表にも繋げることができた。

一方で、私自身の所属の変更に伴い、本連載に区切りをつけることが妥当だと判断した(2025年1月31日付で、クラーク記念国際高等学校を退職予定のため、継続した実践等が困難になったため)。

そこで本稿では、これまでの連載を振り返ったうえで、雑感を述べて連載を締めくくりたいと考える。

2. これまでの連載を振り返る

ニュースレターの第85号から121号までに17本の記事を執筆した。掲載号と内容は下記のとおりである。

巻号	内容
85	連載をはじめるとあって
86	『生徒指導提要』における校則
87	校則と司法の判断
93	『校則見直しガイドライン』
94	諸外国(フランス)の校則
95	校則と「子どもの権利条約」
96	校則を公開する動き

97	元教員への聞き取り調査
98	『生徒指導提要』の改訂と校則
99	ブラック校則
105	校則と「こども基本法」
106	「校則の見直し」はいつから？
117	「障害者権利条約」と「障害者差別解消法」
118	「ルールメイキング」を考える(1)
119	「ルールメイキング」を考える(2)
120	なぜ化粧が校則で禁止されているのか
121	【本稿】これまでの記事を振り返って
コラム	京都市学校歴史博物館企画展「潜入！学校文化の舞台裏」を見学して

「校則の在り方」を考える際に念頭に置くべき、法律や条約、教育時事・動向、著名な実践などを取り上げ、トピックごとにまとめてきた。様々な文献にあたり、自分のなかで咀嚼して、なるべく端的に執筆するように心掛けてきた。「校則」に関係するトピックを整理することで、徐々に「校則」の全体像を明らかにしていくことが目的であった。

3. 連載を通して考えたこと

本連載中に、勤務校において「校則」に関する様々な動き(特に、生徒が主体となった動き)があった。例えば、「校則の見直しを訴える生徒が生徒会長選挙に出たこと」「クラスメイトにアンケートを取り、見直した方が良いと思う校則やルールを筆者に提案してきた生徒がいたこと」などが挙げられる。特に後者の生徒については、筆者が知っている各地の事例や方法を共有することで、それを参考に自分たちにできることを考えている姿がみられた。大きな流れを起こすことは適

わなかったが、「校則」をテーマにした話し合いや議論を活発にできたことは、筆者にとっても大きな財産となった。

また「校則」をテーマに調査・研究した成果を下記場で発表することができた。

・研究発表「博物館を活用して「校則の在り方」を考える」（八洲学園大学リカレント研究センター リサーチサロン研究会, 2023年7月16日）

・単著「『校則の在り方』を考える特別活動授業モデルの開発ー博物館の人的・物的資源の活用を事例にー」『関西教職教育研究』第13号, pp.44-51, 2023年

研究発表に際して、多くの方から賜ったご批判や感想も筆者にとって大きな刺激になった。特に、校種が違う先生方（小学校・中学校の先生方）のお話や、異なる課程（全日制・定時制）での実践やお話は、勤務校をイメージしながら具体的に考える機会を与えてくださったと感じている。これまでにお世話になった全ての方に御礼申し上げる。

4. さいごに

この連載では末尾にQRコードを添付しています。拙稿に対するご意見・ご感想などございましたら、ぜひQRコードからお寄せいただけますと幸いです。今後の研究や執筆活動の参考にさせていただきます。なお、本稿における内容や意見は、筆者個人に属し、筆者が所属するいかなる組織・団体の公式見解を示すものではありません。



ご意見・ご感想などは、上記のQRコードからお寄せください。

【謝辞】

本連載をおこなうにあたり、勤務校であるクラーク記念国際高等学校の先生方をはじめ、多くの方にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

【付記】

これまでに『月刊ニューズレター』に投稿した記事は、筆者のresearchmapでも整理しています。併せてご覧いただけますと幸いです。



進学案内書にみる戦前期東京の予備校(10):

『全国学校案内』(明治41年)(2)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号は、前号に引き続き内外出版協会より刊行された高橋都素武編『全国学校案内』の1908(明治41)年のものを取りあげる。

今号では1908(明治41)年のもので、「専門学校入学私立予備学校」に掲載されたものを取りあげる。

正則予備学校(東京市神田区錦町三)

齋藤氏の正則学校は之を二部に分かち、正則英語学校は専ら英語を教授し、正則予備学校は主として理化学及び数学を教授するもので有る。抑も都下の高等予備学校の中にて、成績の最も優良なるは早稲田予備校にて、また最も多く良教師を集めたるは、何人も先づ本校を推さざるはない。本校の授業時間を分ちて午前部、午後部及び夜学部の三部とし、午前部に高等受験科、数理化受験科、初等数理化受験科及び中等科を置き、午後部に普通受験科、中等科及び数理化受験科を、夜学部に高等数学科、甲種数学科、乙種数学科、丙種数学科及び物理化学科を置き、外に臨時部と称し、臨時受験科及び夏期講習会を設置するを例とす。以上の各学科は、皆物理、化学、博物、数学、歴史等の諸学課を主として英語を欠くを以て、受験者は此等の学課のみを学ばんとすれば兎も角、若し英語をも併せ学ばんとすれば、時間を案配して本校に通学するの傍ら、また英語学科にも通学せねばならぬ。斯くの如く、授業時間の数甚だ多くして、出入往復繁忙を極め、為めに自習時間の大部分を減殺するゝが如きは、受験者につては決して得策でないと云ふものがある。これ亦大に考ふべき問題である。本校生徒数は常に一定せざるも、常に二千乃至三千の生徒を収容し居ると云ふ。

職員（校長）齋藤秀三郎、（教頭）柴田初治郎、（国語）鈴木忠孝、島野幸次、（漢文）池田蘆洲、杉山孚富、（作文）堀江秀雄、（歴史）文学士田淵友彦、同池田夏苗、植木直一郎、（地理）設楽金三郎、（数学）理学士宮本久太郎、同遠藤又蔵、宮本藤吉、東野十次郎、山本安次郎、富永太郎一、今津健樹、片桐鐵三郎、近藤剛直、宮田耀之助、石田竹太郎、岡本熊男、加藤元、（博物）理学博士伊東篤太郎、須川賢久、（理化）理学士柴田初治郎、同足立震太郎、麻生繁雄、山下祥輔、（図画）眞野紀太郎。

早稲田高等予備校（東京市牛込区馬場下町）

本校の目的は、高等の諸官立学校に入学せんと欲し、入学試験に応ずる者のために適切なる予備教育を施すに在る。殊に本校は、諸官立学校の中にも高等学校大学予科入学者に於て最も優秀の成績を示し、昨年の如きは各高等学校入学者総数の七分の一は、実に本校の指導教育を受けた者であつた。蓋し其の成績の良好なるは、必ずしも教師の最も良好なるが故ではなくて、其の指導教授者の最も妥当なるが為で有る。彼の正則予備学校の如きは、皆都下に令名ある教師を集めたるも、其教授法が単に蓄音機的なるにより、学生の多くが好成绩を得られぬのである。然るに本校の教授法は、頗る其の用意周到であつて、単に講義の注入のみを事とせずして、専ら学生の自動自習的勉強を奨励し、同時にまた盲進的の勉強を禁じつゝある。是れ即ち受験予備教育の秘訣であつて、本校は斯くして以て抜群の好成绩を得るので有る。本校の修学期を、普通一箇年と定め、九月及び一月の両度に於て学生を招募して居る。生徒数は四百、若くは七百を定員とするが如し。

職員（校長）法学士大隈信常、（教員）教頭文学士中野禮四郎、理学士田中三四郎、宮井安吉、永井一孝、文学士本多浅次郎、外拾余名

国民英語学会（東京市神田区錦町三丁目）

本校と正則英語学校とは、其の名は英語学校で各々数千名の生徒があるが、

しかし英語を専門として学ばんとする者は極めて少数であつて、其大部分の学生は皆諸官立学校入学の準備にあらざるはない。さて入学試験の準備には、英語と数学とが骨子であつて、之れに次ぐものは即ち理化学であれば、本校は其の主要学科たる英語科の外に数理化受験科なるものを附設し、以て諸学校入学準備者をして、英語並に数理化学科をも兼修するに便してある。また本校の数学科にも、頗る令名ある良教師を聘用して居る。

職員（校長）磯部彌一郎、（教頭）岡村愛蔵、（数理科教師）池上泰次郎、理学士林鶴一、笠原留七、金澤卯一、山下安次郎、理学士藤田外次郎

中央高等予備校（東京市神田区中央大学内）

本校は中央大学の構内にあつて、其の目的は早稲田の予備校と同じく、高等の諸学校に入学志望者の為め、予備の学課を教授する所である。又本校の大学予科は、本校大学部の予備門であつて、在学者は徴兵猶予の特典を有し、且つ高等予備校の授業を随意聴講し得る事となつて居る。此の故を以て、若し徴兵猶予を希ふ学生に在つては高等予備校に入らずして、却つて大学予科に入学する者が多数で有る。蓋し斯くの如くする時は、在学中は勿論徴兵を猶予せられ、一朝官立学校入学試験に落第することあらんか、即ち本校に復歸して翌年は大学部に進入するを得るのである。但し以上の特典を得るには、専門学校令により専門学校入学の資格を要する事は云ふまでもない。

専修学校附属高等予備校（東京市神田区同校内）

明治高等予備校（東京市神田区明治大学内）

専修高等予備校及び明治高等予備校は、共に前項の中央高等予備校と同様の目的を以て起り、また各校の大学予科に於ては、徴兵に関し及び諸官立学校試験に落第せし時に於ても夫々中央高等予備校と同様の利便を^{ママ}享け得るの次第で有る。現に専修予備校の如きは、其の予備校内に学籍を置くものは甚だ

僅少であつて、所謂予備校生徒なるものゝ大部分は、皆学籍を専修学校大学予科に置ける者で有る。また専修予備校には、高商の教授を始め知名の講師多きが故に入学生徒数頗る多く、別して高等商業学校入学志望者に在つては、特に多大の便宜があると云つて居る。明治高等予備校にては、同大学文科の講師主として諸学科を担当し、其の他数理学課を担当する諸講師に於ても其の選択宜しきに適ひ、概して受験学生の間には好評を受けつゝある。

錦城予備学校 本校は矢野文雄氏の校長たる錦城中学校の構内に在る。目的は前項諸学校と同じく、高等の官立諸学校に入学志願者の為め、之れに必要な予備学科を教授するものにて、入学の資格は、中学校、商業学校、農学校を卒業したる者、又は満十七歳以上にて之と同等の学力あることを要す。講師は英語、数学、理科の各科とも、皆令名ある学者で有る。(東京市神田錦町三丁目)

次号では、1909(明治42)年のものを検討していく。

『嘉納治五郎』(1964年)を読む(3) 木下広次による

第一高等学校寄宿舎自治制導入に関する嘉納の見解(その1)

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

はじめに

第118号から『嘉納治五郎』(講道館、1946年)の注目したトピックを紹介している。第120号では嘉納治五郎が森有礼文相の高等師範学校に対する軍隊的な教育方針を批判した「森文相の遺法とその批判」(同書144頁から146頁)に注目した。そして、そのもとになった嘉納治五郎の講述記録(落合寅平筆録)を、大滝忠夫編『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』(新人物往来社、1972年)を通して紹介した。

本号では、1893年1月から3ヶ月間、第一高等学校校長(兼文部省参事官)を務めた嘉納治五郎が、前任校長の木下広次の寄宿舎自治方針について見解を述べていることに注目する。『嘉納治五郎』110頁から112頁にその内容が記載されているが、そのもとになった嘉納治五郎の口述記録を、本号では講道館で閲覧した『作興』第8巻第9号(講道館文化会、1929年9月発行)を通して紹介する。

大滝忠夫編『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』(新人物往来社、1972年)と「教育家としての嘉納治五郎(七)」(『作興』第8巻第9号、講道館文化会、1929年9月発行)を照合したところ、両者の内容は同じであるものの、1972年に出版された大滝忠夫編『嘉納治五郎 私の生涯と柔道』は、仮名遣いなどを改めていた。そのため本号では、嘉納の講述内容により忠実であると思われる『作興』第8巻第9号を使った。やや長いので2回に分けて紹介する。

以下、嘉納治五郎の講述を紹介するが、江戸時代の漢学塾に比べて、明治時代の多くの官立学校は、人数や指導者などの関係から、訓育が行き届いていな

いと嘉納は言い切っている。大人数の官立学校では、江戸期の漢学塾のように、塾主の人格的感化が及びにくいし、古株の弟子が塾頭となって塾主を補佐するということもないからだという。また、官立学校の教師は校長の門下生というわけではなく、異なる分野の専門家でなので訓育上の歩調をとりづらい。さらに、校長はしばしば更迭されると嘉納は述べている。

さすがは、教育の専門家を自負する嘉納治五郎といえるかもしれない。筆者（富岡）は読んでいてなかなかの説得力を感じた。

第一高等中学校でも訓育がほとんど行われていなかったなかで木下広次が寄宿舎に自治制を導入したのは「必ずしも間違ではなかった」と嘉納は述べている。しかし、嘉納によれば、木下導入した寄宿舎自治は問題の多いものであったという。その点についての嘉納の見解は次号で紹介する。

自分が第一高等中学校長を引受けるについては、もとより、相当の抱負があつてのことである。といふものは、自分は木下校長時代の所謂自治主義については、其尽満足はして居らなかった。当時木下氏が之を唱へたについては、必ずしも不賛成ではない。其頃、第一高等中学校のみならず、何れの学校も多数生徒の居る処では、訓育の方法は甚だ行届いては居らなかった。昔の漢学の塾などは概して、一人の先生が居り、之を慕うて其周囲に門下が集まつて来たのである。而して、其中に永年教を受けた先進者が出来て、それ等が塾頭等となつて多くの後進者を指導誘掖したのである。其上、人数についても、一時に千人以上も集まつて居るといふ様なことはなく、数十人乃至百人にみたざる塾生の薫陶をするのであるから、訓育も行はれ易く、自然各の塾には、それゝ塾風も生じて来た。併し、維新以後の学校になつては、学校長として一人の首脳者はあるが、それは役目として其位置にあるので、直接生徒を指導せず、なほ屢々更迭もする。又、實際教育の任に当つて直接生徒を指導する教員は、多くは其校長の門下でもない。それに、高等中学校の如き程度の学校は幾多の学科が分れて居て、そ

れ、専門の教師が居る。校長の専門とせざる学科にあつては、其等専門の教師は、多くは校長より其方面に勝れた人々である。それ故に、校長は多数の教授を統括する任務は尽すけれども、凡ての教授をして自分と同一の考を以て生徒の薫陶に当らしめるといふことについては、維新前の漢学塾などに比して大にやりにくいのである。かういふ譯で、多くの官立学校に於ては、一切訓育は行はれて居らなかつたといつても過言ではない。私立学校に於ても維新後は、多くの学校は同様な状況にあり、又、或種類の学校に於ては、学校維持の爲に生徒の授業料を目的として生徒の意を迎へるといふ様な場合も生じて来て、左様な点から、訓育の徹底せざる場合が少なからずあつたのである。かやうな実際の状況に鑑みて、木下氏は寧ろ自治を唱道して、生徒自身に己を治むる責任の感を強からしむる方針に出たのであつた。それ故に、木下氏の所謂自治主義といふのは、必ずしも間違ではなかつた。

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらゐを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

2025年1月18日に行われた大学入学共通テストの政治・経済において、ふるさと納税の出題について、「地方公共団体は、ふるさと納税で集めた寄付金を、社会保障や教育サービスの充実など、さまざまな目的に活用できる。また、地域住民以外の寄付者に対する返礼品を通じて、地域の資源の内容や特徴を地域外に発信できる」などと、記されていました。昨今では、そんなふるさと納税による大学支援も、少しずつ社会的に注目され重要視され始めています。

たとえば東京大学では、ふるさと納税を活用した自治体地域との協働活動を、地域連携活動の一環として積極的に位置付けています。北海道北見市：ところ遺跡の森整備など（3割を大学に充当）、岐阜県飛騨市：ひだ宇宙科学館カミオカラボの整備など（3割を大学に充当）、和歌山県新宮市：熊野学の研究促進や熊野の文化財保護など（3割を大学に充当）、東京都文京区：学生らによる御殿下サッカースクール・本郷で馬に乗ろう！・東大野球場で遊ぼう！・応援部の応援パフォーマンスなど（7割を大学に充当）、が東京大学のふるさと納税サイトにて精力的に挙げられています。東京大学との地域連携事業を支援するという各自自治体のふるさと納税から一定割合の充当がなされ、各地域に根ざした支援活動を行い、大学にとっても関係施設の整備等が進められている・・といえます。

さらにちょっと興味深いのは、直接大学に寄付するのとどう違いますか？という指摘に対し、ふるさと納税による方が直接の寄付よりも控除幅が大きく、大学と地域発展にも貢献できると、大学の基金事務局サイトでは記されています。殺し文句なのでしょう。（谷本）

「授業のネタになるかも」と思って書店で目にした藤尾均『「学校小説」の残光と残影 明治・大正・昭和の34編』（新評論、2024年）を購入した。「学校小説」34冊はなかなか多い印象だが、さらに「第一部「学校小説」を外観」では、110余編の「学校小説」が「戦争と青春」「大学生の恋愛事情」「受験と予備校・塾・家庭教師」「作家の自伝小説・自伝的小説」などのテーマごとに紹介されている。小学校教師を描いた谷崎潤一郎の『小さな王国』（1918年）、1930年代の義務教育年限延長構想を取り扱った徳永直『八年制』（1937年）など、まったく知らなかった「学校小説」が数多くあることを知り、日頃の不勉強を痛感するとともに、色々な「学校小説」を読んでみたい、という気持ちが高まった。（富岡）

この年末年始に、私自身の出身地である山口県下関市に少額のふるさと納税を行いました。その際に、下関市の自治体基礎データを拝見したのですが、人口減数も3645人（2023年末）で、子どもの割合10.6パーセント（2024年元日、全国平均11.51パーセント）、高齢者の割合36.4パーセント（2024年元日、全国平均28.76パーセント）、そしてその結果としてか、過疎状況：過疎地域と見なされる区域がある・・・ということでした。正直、少子高齢化については想像もしていたことですが、基礎データの数値から出身地の現況を理解できショックでした。そんななか、2024年12月21日のKRY山口放送ニュースの報道で、下関市内12校の高校生らが、市の幹部職員らと市の課題である人口減少や空き家対策などをめぐって、市議会であつく議論したといひます。この高校生議会に参加した高校生によれば、下関市をよくしていきたい!ので、将来は地域にかかわる仕事がしたい・・・などの声も出ていたそうです。このニュースを知って、出身の地元には希望の光もあると救われた思いがして少し安堵しました。（谷本）

記事でも触れましたが、2025年1月31日をもって、クラーク記念国際高等学校を退職します。2018年に入職してから約7年間お世話になりました。お世話になった生徒や保護者の方、教職員や教育顧問の先生方、地域の方々にこの場を借りて御礼申し上げます。皆さまに支えていただき、充実した教員生活を送ることができました。

最初に配属された芦屋校では、「思い出博物館の図録作成」「ウィキペディアタウンの取り組み」「生徒達との学会発表」「学校図書館の開室」など、様々なチャレンジをしました。今考えると、かなり自由にさせてくれたと思います 笑 感謝の気持ちでいっぱいです。本レターで「学校資料の教材化を模索する」を継続して執筆することになった際は、同僚がサプライズでお祝いをしてくれました。何でも相談できる同僚や実践を後押ししてくれる上司の存在はととてもありがたく、心の安定や安らぎにつながっていたと思います。

2月から心機一転、新しい業界で頑張ろうと思います。今後とも、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。（八田）

毎年、1月は、看護師養成の専門学校で、「教育学」の集中講義を行っています。看護職のための「教育学」とは、どのような内容にすべきか。教育学研究者が執筆する「教育学」の教科書では、どうしても学校教育が中心です。看護職の学生に、「教育学」をどのように教えるのか、日々、悩んでいます。（山本剛）

会員消息にも約1年ぶりの登場となってしまいました。今回もコラムの投稿で、原稿の投稿となると2020年8月号が最後ようです。以前、連載していた「未完の教授学者……」関係の史料も収集は進めており、下書き自体は連載の最後まで作成済なので、そろそろ細々とでも連載を再開しなくてはと思っています。

去年の消息で書いたように今は上越に居ます。雪深い地として知られ、今年もニュースで東北の日本海側および新潟が大雪で大変だといった報道をしているので、いろいろな人から大丈夫かと聞かれます。ただ新潟県上越市に関しては今シーズン、雪が降ったのは山沿いのほうで平地である高田・直江津(旧上越市)あたりはたいして降っていません。だんだん、季節外れに暖かくなるようですし、このまま降りすぎることなく、今シーズンが終わればと思っています。(長谷川)

先日、知人に誘われて企業の企画担当の方々を中心としたブレインストーミングに行ってきました。会場は東京駅からほど近い高層オフィスビルの1階で、思いっきり場違いな感じで参加しましたが、ブレインストーミングが始まってみると、大学などでのグループディスカッションとそれほど変わらない雰囲気になってきました。学校での経験は、社会に出てからの活動の基盤になりうることを改めて実感しました。学校を楽しいものに変えていくことは、生きやすい未来を作る方法の一つだろうと思いました。(冨岡)